

Archaeological Laboratory, Co.,Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.268
2026.1.1
謹賀新年

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

加曾利B式土器

—『日本先史土器図譜』と現在 —

鈴木 正博

● 第67回 ● 「加曾利B2式」概観と斜線文土器

本連載前回までの「B2式」要諦は、その拠るべき定義の遵守と命名に拘る標本選定戦略の厳密さ、そして「B1式」直後からの型式学となる「文様帶変遷論」の構築にある。文献(1980b・1980c)の初心では、「図譜」を学びとする「細別」の見直しに止まらず、隣接地域の諸系列及びそれらの相互関係から見出される集団関係の複雑さにも接近し、新たな挑戦である「土器社会論」を企図する等、今日にも引き継がれ見直される学的宿命に至る。

文献(1980b)は年代と系統の組織的骨子となる文様帶変遷の概観を弁える。関東地方の「B2式」は常南総北の「遠部系列」を中核とし「斜線文土器」が展開すると共に、他方で学史を飾る武蔵の「大森系列」(「B2(古)・(新)式」比定の「大森1・2式」)を俯瞰し、より周辺地域への拡散も指定期する。周辺には中核以外にも「遠部第5類土器」の複雑さが垣間見られ、その様相は幾つかの特徴的な複数系列が濃淡を有し斑状に重複するが如くで、具体的な幾つかの指摘を見る。

第一は「中妻系列」からの変遷とされる「常陸系列」で、その後は文献(2003)により「吉見台系列」として「B2(古)式」に再編成され、「B2(新)式」には体部の括れ部に刻文等多少文様帶が変化する「下総系列」が主に東京湾東岸等に分布する。第二は異質ながらも幾何学形磨消縄紋の発達を共有する「緩衝系列」が関東北の広域に展開し、分布密度に濃淡を有しつつ「B2式」に「型式組成」する。第三は「B2式」の北縁となる南奥には、「羽状斜線文」と対峙する「横帶並行沈線文」の「川原系列表」が独立して分布する。北関東への影響も見られ、境界領域であるいわき地方では「B2式」の影響の下に文献(2009)の「相子島下層式／上層式」が層位的に導出される等、層位と系列群による見直しは今後も継続されねばならない。

さて、中核となる「B2式」本体は「図譜」「B2式」の「精製土器様式」標本と遺蹟の層位との併存関係を起点とする文様帶の型式学に留まらず、「半精製土器様式」と「粗製土器様式」も大量の併存を見ており、形態・装飾の型式学を経てそれらの特徴が収斂され、「型式組成」としてアッセンブリジされる。「図譜」「B2式」標本19点の遺蹟別内訳は、遠部11点(内貝塚1点)、江原台6点の如く印旛沼南岸地域を中心とするが、他に立木貝塚・加曾利貝塚から各1点を補い下総略全域を覆う。標本は器種・形態別文様別が整然と纏められ、器種・形態別解説は「B2式」と「宝ヶ峯式」との系統関係と深く関わるが、紙面の制約で省略に従い、文様別作法へと収斂させる。

「斜線文土器」の詳細は文献(1980b)に譲るとして、標本19点の斜線文作法は概略、「羽状」(上下を横位の羽状構成に密充填し斜線並行文とする「羽状斜線文」の略)、「鋸歯状」(互い違いに斜線傾斜を反転させ、鋸

歯状に密充填し斜線並行文とする「鋸歯状斜線文」の略)、「斜行状」(斜行状に粗く施文し斜線並行文とする「斜行状斜線文」の略)、「横線状」(横線状に粗く施文し並行沈線文とする「横線状沈線文」の略)、「綾杉状」(丁寧な施文の並行沈線文により上下を横位の羽状構成とする「綾杉状沈線文」の略)の5作法に分類される。「図譜」「B2式」は「斜線文土器」が19点中15点の多きを占め、斜線文の作法を図版番号別に一覧化すると第75図となる。

(粗):「粗製土器様式」、(半):「半精製土器様式」、(無):「無文土器」						
「図譜」「B2式」図版番号	30-1	30-2	31-1	31-2	32-1	32-2
斜線文の作法	羽状	羽状	羽状	羽状	斜行状	羽状
「図譜」「B2式」図版番号	33-1	33-2	34-1	34-2	35-1	35-2
斜線文の作法	(粗)	鋸歯状	鋸歯状	横線状	羽状	横線状
「図譜」「B2式」図版番号	36-2	37	38	39-1	39-2	
斜線文の作法	羽状	(半)	(無)	斜行状	綾杉状	

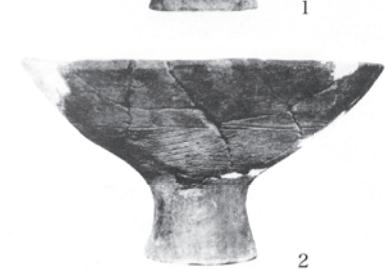
▲第75図：『図譜』「B2式」の「斜線文土器」に見る斜線文の作法

第75図の主体である8点の「羽状」作法は『図譜』「B2式」に独自に発達した文様帶の特徴であり、「宝ヶ峯式」の文様帶とは明確に区別される。第76図に観られる2点の「鋸歯状」作法は、『図譜』「B2式」を始点として東北の「宝ヶ峯式」から北海道の「手稻式」に至るまで広範に展開する。この「鋸歯状」作法は該期の環境変動を背景にして北海道→東北→関東への広域に至る集団の連絡・交渉として注目している(鈴木正博(2024)「宝ヶ峯」断想」「利根川」46)。「斜行状」作法と「横線状」作法も各々2点ずつ見られるが、施文帶に着目すると縄文施文との互換関係にある。

図版39-12の1点のみの

「綾杉状」手法は武蔵野方面「大森2式」の「ソロパン玉形土器」(第16図参考)からの影響が指定期され、『図譜』「B2式」-「大森2式」の並行関係を訴求する。

畢竟、「図譜」「B2式」の「斜線文土器」は内部構造に社会変動を観る視点が要求される文様帶で、決して単調な斜線文では無い。その背景は「遠部第5類土器」の複雑さと同等である。



▲第76図：『図譜』「B2式」図版34-1(立木貝塚)・2(遠部)の「鋸歯状」作法

※巻頭連載は隔月です。次回は鶴志田篤二さんです。

目 次

- 加曾利B式土器 「加曾利B2式」概観と斜線文土器(第67回) 鈴木正博 …1
- 考古学の履歴書 私の考古遍歴(第18回) 工業善通 …2

- リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト(第260回)
- 考古学者の書棚 『国分寺の誕生』

- 小林友佳 …3
- 米倉貴之 …4

考古学の履歴書

私の考古遍歴 (第18回)

駅の出口手前には入国審査所があって、長い列をなして並び、検査官にパスポートの提出を求められて、渡すとそのままで勤めで、パスポートの返却はなかったので、不安になったが、下車した全員がそうなので、何とかなるだろうと列に従って進んだ。次は各自100マルク(約1万円)を強制的に東ドイツマルクに両替させられた。次はパスポート番号を呼ぶから、自分の番号のを受け取って出ていいとアナウンスがあった。しかし自分の6桁のNoがドイツ語の早口で棒読みされても、とてもわからないので、これには本当に困った。私の数人前に並んでいた帽子をかぶつたオバサンが呼ばれたら、私はすぐだと見当を付けてドキドキしながらしばらく待って、私のNoが呼ばれパスポートは戻りやつと解放された。

出口を出て地図を見ながら大通りを進みかの有名なフンボルト大学前を通り進むと向かいにドイツ国立オペラ座があった。催物案内板ではこの日はラッキーなことに夜7時からモーツアルトのドンジョバンニの公演があるではないか! 中に入って当日券はあるかと聞くとあるというので、一番安い席を両替した東ドイツマルクの使い始めとして購入した。しかし、私の入国ビザは24時間のみの適用なので、帰りが無事駅の検問を通過出来るか実に不安であった。オペラは3幕まで見て名残惜しいが駅へ向かい、ゲストハウスに戻ったのはP.M.12時を過ぎていたので、管理人に扉を開けてもらうことになってしまった。大学一オペラ座前の道路は、西へ進むとプランデンブルグ門に通じる大通りで、かつてはベルリンの大動脈であった。少しはずれると第2次世界大戦の傷跡がまだ残り、瓦礫が山積みになっていた所があった。

目的のペルガモン博物館は東西ベルリンの境であるシュプレー川の中島にあって、外観の正面はギリシャ風の円柱に支えられているが、大戦の跡らしく黒ずんで薄汚れた建物で、入り難い正面であった。入場券は確か2~300円くらいだったと思う。第2室目の天井の高い大広間に入ると、何とその正面にペルガモンの大祭壇が復元されているではないか! 壊倒される大きさで居座っている。この大祭壇は現トルコの西部海岸近くのペルガマ遺跡で1880年代にドイツ人研究者によって発掘されたもので、ベルリンへ到着後数々の研究を経て復元され、第2次世界大戦の爆弾の直撃を受けて甚大な被害をこうむり、戦後再復元された。この最初の復元の際には、わがゲストハウスのもと主であったヴィーガント氏が参加していたことを最近になって本で知った。第3室目にはミトレスの市場門、次の室にはヘレニズムの建築群と天井の高い部屋で復元されていて、床には色豊かなモザイク画が復元されている。いくつかの部屋を経て、次はバビロニアのイシュタル門が復元されていて、天井を突き抜けそうである。写真をプリント用、スライド用と撮りわけていると、もう昼になってしまった。館内のレストランで遅い昼食をとり、館を出た。付近には美術館・博物館がいくつかあって、東西ドイツ統一後には組織もかなり整備され、新装なったこれらは「博物館島」という名で2013年に世界文化遺産に登録された。

ベルリン最後の日は西ベルリンのシャルロッテブルグ宮殿の展示と、その前の道路に向かい合って建っているエジプト美術館と、ギリシャ美術館を見学した。前者では始めて見る本格的な宮殿建築と室内装飾に圧倒され、ただただ驚くばかりであった。宮殿の何室かに景徳鎮窯などの中国陶磁器が所狭しと並べられていたが、少し離れてベルリン周辺で出土した考古遺物も陳列されていた。そこで見た土器の一つに鉄器時代の大きな甕があって、そこへちょうど家族連れが見学している状況に出会ったので写真を撮り、後日講談社刊の『弥生土器』に「私の見た最大の土器」としてこの写真を掲載することにした。今では九州の甕棺の方が大きいものがあるであろう。

エジプト館では、ここにあるとは思いもよらず「ネフェルティティ王妃」の胸像と出合った。昔、大学の授業で杉原先生が自分が撮ったこの胸像のスライド写真を写しながら、参考書などに載っている像は左方向からの写真が多いのは、右耳が欠損しているからだという説明を受けた。私はそのことを思い出しながら、この像と対面した。ギリシャ館では赤絵・黒絵で飾られた多くの土器群に魅了されて食傷気味になったところで、出口

工 楽 善 通

では黒絵で飾られた人面顔の双把手杯1点を大きく写した館のポスターが気に入り、購入して巻いたまま持ち歩くことにした。

ところで来週はフランクフルトの考古学研究所を訪問し、F.シューベルトさんに会うことになっていたが、4日間のみデンマークを回ってくることを電話で説明し、何とか了解してもらった。デンマークへの出発の前日はハンブルグで一泊し、翌朝早くに列車で出発しリューベックへ向った。実は奈良に居る間に交通公社で2ヶ月有効のユーレール・パスを購入しておいたので、これを利用すればヨーロッパのほとんどの国有鉄道が2等車(3等まである)を利用できるので、これを始めて使うことにした。リューベックから、終点のコペンハーゲンまで、列車ごと連絡船に乗りつれて行ってくれる。日本でも経験したことのないことで、しばらくは座席に座っていたが、途中から下車して、デッキに出て、海上の島々を眺めていた。40分くらいでシェラン島に上陸し、あとは鉄道でコペンハーゲン中央駅に到着。次の日は一番にチボリ公園脇にある国立博物館を見学した。ここはトムゼン(1788-1865)が1820年代に、陳列品のうち先史時代遺物を分類する上で「三時期区分法」を編み出したという、考古学にとって大きな成果を上げたところである。もちろん館の先史時代展示はそれに従って整然となされていた。ここで陳列の秀逸は、何と言ても図録でよく見る青銅器時代の「日輪の馬車」で、特別室のケースに復元され、明るい照明に照らされて目立っていた。隣の特別室では、バルト海周辺の琥珀文化が紹介されていて、豊富な出土品の数々が、すばらしいディスプレイでケースと壁面に飾られていたのが、40年余たった今でも印象的だ。ここでも北欧におけるバイキングの活動は工夫した展示がされていた。

地図で見るとコペンハーゲンとスカンジナビア半島南部は接近しており、ポスターで見たスウェーデンのあのマルメはすぐ対岸である。館を出る際受付で、マルメを尋ねると、パスポートなしで高速艇ですぐ行けますよという返事であった。駅の案内所へ行き、艇の発着時間や乗船場などを調べ、天気も良好ううなので翌日に行くことにした。コペンハーゲンを出港するとすぐ放送があって、岸边にアンデルセンの「人魚姫像」が見えると放送があった。マルメは、大きなクレーンを備えた漁港らしく小さな静かな町で、歩いて20分のところに博物館はあった。16C半ば頃に完成したヒュース城を1937年に一部改装して博物館と近代美術館として使用しているとのこと。ここでも、付近のバイキング時代の出土品が多く展示されていたが、展示スペースはそれほど広くはなかった。例のポスターの出土品はこれら的一部なのだろう。売店で、そのポスターを見つけ、1枚500円余で2枚購入した1枚は大封筒に納まるよう折りたたんで、奈文研埋文センターへ元氣でいるという近況と共にPostで発送し、他の1枚は巻いたまま持ち歩くことにした。そのポスターは帰国すると埋文センターの大部屋の壁に貼ってあって話題となった。

デンマークと言えば、やはり貝塚文化で、その現場を見たいと思い、ガイドブックを見てユトランド半島東部海岸近くにあるオーフス市のモースゴー先史博物館へ列車で行った。駅前からバスに乗り、郊外の丘陵上にあって、近世民家を移築した木造の建物が数棟あり、陳列棟や体験学習施設となっている。館の担当者に尋ねると、今はまだ未完成で、少しづつ整えている最中だという。最近のガイドブックでは完備されて、野外博物館となって好評のようである。'90年代には奈文研の松井章君と宮路淳子さんが貝塚発掘のワークショップに参加している。(続く)

略歴

1939年	兵庫県高砂市に生まれる
1958年	兵庫県立高砂高等学校卒業
"	明治大学文学部史学地理学科入学
1964年	同 大学院修士課程修了
"	奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部へ入所
1969年	文化庁記念物課へ出向
1973年	奈良研平城宮跡発掘調査部第2調査室へ配属
1992年	奈文研飛鳥資料館 学芸室長
1995年	埋蔵文化財センター長
1999年	奈良国立文化財研究所定年退職 (財)ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所勤務
2001年～2021年3月	大阪府立狭山池博物館館長

隔月連載です。次回は山本暉久先生です。

リ レーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 260

及川伊勢宮遺跡～神奈川県厚木市

小林 友佳

はじめに

遺跡が所在する厚木市は、神奈川県のほぼ中央を南北に流れる相模川右岸の中流域に位置します。上流域西北部から西部は主に丹沢山地の北東側にあたり、山地の南東は丹沢山地を源流とする中津川、荻野川、小鮎川、恩曾川、玉川などの河川によって丘陵及び台地が形成され、東側は相模野平野と呼ばれる沖積平野が広がっています。及川伊勢宮遺跡は河岸段丘構成層田名原面にあたり、荻野川と中津川に挟まれた荻野台地に位置しています。遺跡では、近世から縄文時代にかけての遺構と遺物が確認されており、連綿と土地利用がなされていたことが明らかとなっていますが、特筆されるのは古墳時代の調査成果です。

相模川流域の様相と及川伊勢宮遺跡の古墳

相模川流域の本遺跡周辺において古墳時代前期・中期の古墳としては右岸では、厚木市ホウダイヤマ古墳、地頭山古墳、愛甲大塚古墳、四獸形鏡が出土した直径55mの円墳または前方後円墳とされる吾妻坂古墳、左岸では3世紀後半の秋葉山古墳群、瓢箪塚古墳などがあげられます。相模川流域では小河川単位に古墳が築造されたことが分かってきており、本遺跡が所在する荻野川流域には、南方約600m下流の位置に5世紀後半とされる方墳1基を含む円墳の周溝が10基ほど確認された山ノ上古墳があります。

及川伊勢宮遺跡では、令和4(2022)年度～令和6(2025)年度にかけて、前方後円墳・方墳それぞれ1基、円墳2基の合計4基の古墳の調査を行っています。本誌では、古墳全体が調査できた、前方後円墳(1号墳)、方墳(2号墳)、円墳(4号墳)について紹介します。

前方後円墳(1号墳)は調査以前から後円部の墳丘が一部遺存していたため、円墳と推測されていましたが、今回の調査によって前方部と周溝の存在が認められるとともに、相模川の支流である荻野川流域では初の事例となりました。しかし、墳丘確認調査を行った結果、埋葬施設は遺存しておらず、副葬品等の古墳関連遺物の出土もありませんでした。奈良・平安時代、中世面の調査時には、既に土地利用や後円部を塚として転用した痕跡が認められており、墳丘は築造後比較的早い段階で盗掘・削平を受け、縮小していたと考えられます。墳丘全長は37m、周溝を含めた主軸長は45mで、後円部直径21m、くびれ部は



▲1号墳

幅6m、前方部先端は約15m、主軸方位はN-66°-Wで、周溝は墳と相似形にめぐり、後円部側の幅が約5m、深さ約1m、前方部側が幅約3.5m、深さ約50cmを測ります。周溝からは土師器の壺と高坏の破片が数点出土しており、赤彩を施すものや畿内系の精製土器も含みます。築造年代は周溝出土遺物より、古墳時代前期後半～中期初頭(4世紀後半～5世紀初頭)と推定されます。方墳(2号墳)は、墳丘の大半が調査範囲外であるうえに、範囲内である南西側も宅地造成により大きく削平を受けていましたが、方形にめぐる周溝のうち二辺を検出しました。墳丘は一辺約14m、周溝を含めると約18mの規模と推定され、主軸方位はN-35°-Eです。周溝は幅が約1.8～2.0m、深さは約1.2～1.5mと幅が狭くて深く、また、その周溝覆土断面からは特徴的なテフラ層を確認しています。遺物は周溝南東コーナー付近のテフラ上層から、土師器の小型丸底壺2点が約3m間に据え置かれた状態で出土しました。いずれもほぼ完形で底部穿孔はされておらず、うち1点は外面から口縁部内面にかけて赤彩を施しています。そのほか、高坏の破片も数点出土しており、これらはともに供献土器である可能性が高いと考えられます。築造年代は周溝出土遺物より、古墳時代前期後半～中期初頭(4世紀後半～5世紀初頭)と推定されます。円墳(4号墳)は、周溝を含む直径が12.1m、周溝の幅は2.6～4.1m、深さ0.24～0.37mです。なお、周溝は全周せず、北西側で推定幅2.2～2.7mの地山を掘り残した土橋状の施設が検出されました。土橋部中央を主軸とする方位はN-68°-Wです。墳丘及び埋葬施設は遺存していましたが、古墳関連遺物として周溝から、水晶製勾玉1点、鉄製刀子1点と土師器の壺と高坏の破片が数点出土しています。土器片はいずれも小破片のため詳細な時期破碎不明ですが、築造年代は1号墳と2号墳同様に古墳時代前期後半～中期初頭(4世紀後半～5世紀初頭)に含まれると推定されます。

さいごに

本遺跡の前方後円墳は、前述した吾妻坂古墳や厚木市域西端の愛甲台地上に所在する同時期の前方後円墳である、墳丘全長65mのホウダイヤマ古墳、72mの地頭山古墳、推定80～90mの愛甲大塚古墳に比べ小規模です。埋葬施設及び副葬品は不明ですが、被葬者はこれらの下位に位置し、支流域程度の小支配領域を有した小地域首長と理解するのが妥当と考えます。いずれにせよ、特に前方後円墳という荻野川流域に勢力をもつ古墳時代前期～中期の新たな首長墓と神奈川県下では事例の少ない方墳の発見は、相模川流域における首長墓系譜・勢力図にとどまらず、古墳時代における地域社会構造と、その展開過程を考えていく上で重要な意味を持つといえるのではないかでしょうか。しかしながら、荻野川流域では現時点でも同時期の居住域が確認されていないことや、今回の調査区のさらに北側にも墓域が展開する可能性が想定されることも含め、当該地域における古墳時代の実態については不明点も多いです。今後、本遺跡の整理作業の担当になることがあれば、当該地域における古墳時代社会の復元を試みたいと考えています。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは吉田知世さんです。

考古学者の書棚

歴史文化ライブラリー430 「国分寺の誕生 古代日本の国家プロジェクト」

須田勉 著／吉川弘文館 (2016)

米倉 貴之

はじめに

本書は、タイトルにあるとおり、古代における一大国家プロジェクトであった国分寺造営に関する概説書である。大まかな構成は、前半に当時の仏教思想や社会的状況を文字資料から読み解き、後半に各地の国分寺造営について、発掘調査成果を基に記載・考察されている。

本稿執筆の話をいただいた際、「さて、本は何にするか?」と、専門書の少なくなった書棚にある本の背表紙を指でなぞっていたところ、気づくと本書を手に取っていた。それは恩師である須田 勉先生の著書であることはもちろんだが、古代、特に考古学としての仏教や寺院を学びたいと考えている学生に対してお薦めしたいと感じたからだ。

お薦めできるポイントは2つ。まず本書の構成として、時代背景に触れたうえで、時系列に語られることで頭に入ってきやすいこと。これは学び始めたばかりの学生には非常にありがたいだろう。

2つ目として、特にこちらがお薦めする最大の理由であるが、過去の人々の人間臭さを感じされることである。それまで経験してきた歴史の授業というのは教科書に書かれた、どこか「別の世界の話」感のあるものだった。だが、大学の講義で話す須田先生の文献資料や発掘調査成果を織り交ぜた当時の話は、ちゃんと厚みのある人間の話であった。

その感覚をぜひこれから考古学を学ぶ学生の皆様には知つてもらいたいと感じる次第である。

さて、本書について紹介とはいうものの、実際に手に取って読むのは皆さんなので、ここで多くを語る必要はない。むしろ語るべきではないし、語るだけの知識も経験もないので、単なる私の感想に近いものを書くことをお許しいただきたい。

国分寺造営に至る背景に思うこと

日本の国分寺造営の背景に、8世紀前半、全国で大流行した天然痘があった。

天平7(735)年、前年に帰国した遣唐使や遣新羅使が菌を持ち込んだとされており、天平9(737)年には、国政の中核を担っていた藤原四卿(房前、宇合、武智麻呂、麻呂)が相次いで死亡し、数年の間で被害は全国に拡大し、一説には当時的人口の約3分の1が死亡したと推定されている。人口減少こそ違いはあるけど、同じように得体の知れない恐怖に包まれた社会的不安な状況には、どこか親近感を覚えるのではないだろうか。

天平9(737)年3月、国ごとに釈迦三尊の造像と『大般若經』の書写を命じる詔が発せられ、仏教の力をもって疫病を撲滅し

ようとした。また時の聖武天皇は、民・百姓に対して米や湯薬の支給、租税の免除、山川や神仏への祈願等のあらゆる対策を打ち出している。天平9年6月には、東海道以下六道諸国の国司に対して疫瘡の治療法を示した太政官府を発している。国司には直接各郡内を巡回し百姓に官府の内容を周知徹底するように命じ、さらに米を持たない百姓には官物として米を至急することまでも命じているのである。

これをみると、それだけ切羽詰まっている当時の社会状況が読み取れるのはもちろんであるが、それ以上に、先に触れたとおり人間臭さを感じないだろうか。同様の人間臭さは、天平13(741)年の国分寺建立の詔や、天平19(747)年11月7日の、所謂、国分寺造営督促の詔にも、国司等の怠慢を理由とした一文が記載されている点から読み取ることができる。民=労働力として使役されるものという感覚だけではない人間味にこそ、この新型コロナウイルス感染症による未曾有の危機を乗り越えた我々だからこそ当時の生きるを感じるのである。

本書の最後に、「これから國分寺研究の方向性の一つは、古代社会や寺院社会の仕組みの中で國分寺僧尼の活動と生き方」を考古学資料を駆使することで究明していくことに触れている。そして、「寡黙な遺構や遺物は、静かにしかも繰り返し語りかけることで、新たな情報を雄弁に語ってくれるだろう」と閉めている。まさに考古学の難しさと楽しさを表した言葉であると感じた。

おわりに

私の手元にある本書には、著者である須田勉先生からの御礼の手紙が綴じられている。先生の古希のお祝いの際にいただいたものであるが、その中に、「國立博物館では、多くの素晴らしい学生に恵まれ、私の大切な宝となりました。」と書かれている。

大学1年の春、考古学研究室の新入生歓迎会の際に、初めて須田先生とお話をさせていただいた時、私の出身が千葉であることを告げると、ご自身が千葉で仕事をしてきたことを話してくださいました。それを聞いた私は、妙に嬉しい気持ちになったことを今でも覚えている。

あれから早いもので20年ほどが経った今でも、考古学の世界の片隅に居られている。そんな私の考古学人生を支えてきたものは、間違いなく大学での経験であり、先生や諸先輩・後輩方から学んできたものである。この場を借りて感謝申し上げる。